HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	薔薇十字とユートピア ： 作者としてのJ. V. アンドレーエ
Author(s)	シュルーター, 智子
Citation	基督教學, 53, 1-20
Issue Date	2018-07-13
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/75527
Type	journal article
File Information	01schlueter.pdf

Hokkaido University Collection of Scholarly and Academic Papers : HUSCAP

論　文

薔薇十字とユートピア
―作者としてのJ・V・アンドレーエ

シュルーター智子

はじめに

ヨハン・ヴァレンティン・アンドレーエ（Johann Valentin Andreae　一五八六～一六五四）は、『化学の結婚』と『クリスティアノポリス』という二つの作品によってその名を後世に残している。前者は、十七世紀前半のヨーロッパにおいて一大ムーブメントを巻き起こした「薔薇十字団（Rosenkreuzer）」の基本文書に位置づけられており、日本でも種村季弘の翻訳[一]によって知られている。それに対して後者は、日本においては一般に知られていない[二]が、トマス・モアの『ユートピア』、カンパネッラの『太陽の都』にならぶユートピア文学の古典の座を占める作品である。アンドレーエ自身はルター派の神学者であり、彼の『クリスティアノポリス』についても、モアとカンパネッラの作品に比べて、とくにキリスト教的、ルター派的な性格が強いということがしばしば指摘される。

こうして、アンドレーエの代表作である二つの著作からは、一見したところ全く異なる作者像が引き出されることになる。すなわち、一方には、錬金術やヘルメス思想、フリーメーソンやオカルト・グループの一種と見なされる薔薇十字団[三]の仕掛け人としてのアンドレーエ像があり、他方ではキリスト教的、ルター派的なユートピストとしてのアンドレーエ像が存在しているのである。このような相反するイメージから、いかにして一人の作者像を描き出すこと

ができるのだろうか。この問いに取り組むために本論文では、アンドレーエに関する研究の現状をふまえて、アンドレーエが『化学の結婚』の執筆に至るまでの状況に焦点を当て、伝記的な資料に基づいて手がかりを探っていくことにしたい。

一．アンドレーエ研究の現在

一九九九年、『クリスティアノポリス』の新たな英訳を出版したトンプソンは、アンドレーエに関する研究が進んでいない原因として、四つの理由を指摘している。[四] 第一の理由として、アンドレーエの文献が長らく入手し難い状態であることが挙げられる。英語圏で知られているのは、一九一六年に出版された『クリスティアノポリス』の英訳のみであり、現存している手稿や出版当時の原本も希少であることが研究の広がりを妨げているという。第二に、アンドレーエが多くの作品をラテン語で執筆している点が挙げられる。「ラテン語が普遍性を失いつつあり、ヨーロッパの地方語に取って代わられつつあった」[五]時代において、アクチュアルな問題を論じる際にアンドレーエが好んで用いた古典的な表現は、必ずしも最適とは言えなかったのかもしれない。ラテン語の使用に加えて三つめの理由に挙げられるのは、文体の難しさである。ヘルダー（Johann Gottfried Herder　一七四四～一八〇三）は約百年前に書かれたアンドレーエの著作について、「翻訳者にこれほどいたるところで難題をつきつける者を知らない」と述べており、アンドレーエの技巧に富む文体と「十七世紀のゴシック趣味」をその難解さの理由として挙げている。[六] トンプソンが最後に挙げる問題は、アンドレーエの関心領域の広さである。当時の知識層においては例外的ではないものの、アンドレーエが扱ったテーマは今日では細分化した専門領域で個別に論じられるため、その多彩な関心を総体的に捉えることが妨げられているという。

しかし、トンプソンによる指摘から約二〇年の時を経て、現在では、少なくとも先に挙げた第一および第二の問題

については、状況がかなり改善されていると言えるだろう。まず挙げられるのは、一九九四年より刊行されているアンドレーエの著作集[七]である。出版社による紹介では、本著作集には「アンドレーエによる文学作品、教書、哲学作品が全て収録されるほか、アンドレーエの時代、彼の交友関係において特徴的な折々の文書と弔辞の中から代表的なものが収録される」[八]という。特筆すべきは、アンドレーエのラテン語作品について、ラテン語原文とドイツ語による新たな翻訳が併載されている点である。なお、本著作集は索引一巻を含む全十九巻（全二十四冊）となる予定だが、二〇一八年二月現在、出版されているのは十巻（十冊）とまだ予定されている半数にも満たない。それでも、アンドレーエの自伝や薔薇十字文書、『クリスティアノポリス』などの著作が、詳細な解説や新訳およびその注釈とともに利用できるようになったことは大きな利点であり、今後のアンドレーエ研究のさらなる進展に資することが期待される。

また、一次資料に関する利用環境の向上という点では、ヴォルフェンビュッテル・アウグスト公図書館のプロジェクト「ヨハン・ヴァレンティン・アンドレーエ（一五八六～一六五四）往復書簡の公開」[九]も挙げておく必要があるだろう。このプロジェクトでは、イギリス・オックスフォード大学の近世書簡オンライン化プロジェクト[十]との共同作業により、アンドレーエの書簡約五千六百通がデータベース化されている。これらの書簡において言及されている人名は実に五百名以上にのぼり、アンドレーエをとりまく交友・交際関係を明らかにする上で、貴重な資料を提供すると思われる。

研究史を振り返ると、アンドレーエ研究のメルクマールとして、生誕二百年と生誕四百年というそれぞれの節目を挙げることができる。生誕二百年にあたる一七八六年には、ヘルダーがアンドレーエの翻訳作品のアンソロジー[十一]を編纂しており、「アンドレーエの生涯と著作を忘却と「異端視」から救い出す」ことに尽力するとともに、「アンドレーエ研究のルネサンス」の舞台を作り出した[十二]。なお、アンドレーエのラテン語による自伝は、一七九九年になって初め

て、ドイツ語訳にて出版されている。[十三]

生誕四百年を記念する一九八六年には、カルフを中心とする記念行事と、アムステルダムのヘルメス哲学図書館（Bibliotheca Philosophica Hermetica）主催による展覧会が開催され、それぞれカタログ[十四]がまとめられている。なお、後者の展覧会におけるカタログの編纂者であるヘルメス哲学図書館司書のギリー（Carlos Gilly）が中心となり、一九九五年には、ヴォルフェンビュッテル・アウグスト公図書館とアムステルダム大学図書館において、薔薇十字運動に関する展覧会「十七世紀のヨーロッパ的現象としての薔薇十字」、ならびにシンポジウムが開催されている。この展覧会のカタログ[十五]には三百を優に超える図版と詳細な解説が収録されているほか、展覧会と同じタイトルの論文集も刊行されており、新たに発見された資料などに基づいた、アンドレーエを含む薔薇十字運動研究の進展を伺うことができる[十六]。その他、アンドレーエに焦点を当てた研究として、デュルメン（Richard van Dülmen）[十七]、モントゴメリー（John W. Montgomery）[十八]、トンプソン[十九]らによる翻訳および研究、そして二〇〇〇年代になって出版されたブレヒト（Martin Brecht）[二十]による伝記なども挙げることができるだろう。

しかし実際のところ、冒頭でも述べたように、アンドレーエについては彼自身が研究の中心に置かれるというよりは、特定の文脈におけるキーパーソンとして言及されることが多い。その文脈の一つが薔薇十字運動であり、もう一つがユートピア思想なのである。そこで以下では、それぞれの文脈においてアンドレーエがどのように位置づけられているのか、具体的に見ていくことにしたい。

二．薔薇十字運動とアンドレーエ

薔薇十字運動は、十七世紀初頭から現代もなおその脈絡を辿ることができる、広範な宗教的・思想的系譜をその概念の下に含んでいる。ここではその発端となった文献、すなわち、三十年戦争（一六一八～一六四八）を目前に控え

るドイツに登場した、三つの文献[二十一]を紹介することから始めていきたい。

（1）薔薇十字運動の発端[二十二]

最初の文書は、一六一四年三月にドイツのカッセルで出版された「賞賛に値する薔薇十字の結社である友愛団の名声、ヨーロッパのあらゆる学者と統治者に捧ぐ(Fama Fraternitatis, des Löblichen Ordens des Rosenkreuzes, an alle gelehrten und Häupter Europae)」（以下「名声」とする）である。この文書は、「全世界の普遍的かつ総体的改革」と題された作品[二十三]の付録として、ハスルマイアー（Adam Haslmayr）という人物による「賞賛に値する薔薇十字の神智学者による兄弟団への応答」という書簡とともに出版されている。この「応答」はすでに一六一二年に出版されたものであり、「名声」自体も一六一四年以前に写本の形で出まわっていたことが確認されている。[二十四]

「名声」では、薔薇十字友愛団の「首長にして創立者、かつて熱烈なる信徒にして聖職者、碩学たるドイツ人」[二十五]クリスチャン・ローゼンクロイツの伝記と、その友愛団設立の経緯が語られる。さらに、「ヨーロッパの学者諸兄」に向けて、「名声」の書き手を含む友愛団の第三世代が発見したというローゼンクロイツの墓を探してみること、そしてこの「名声」に書かれた内容を検討し、各自の意見を公開することを呼びかけている。なお、友愛団に入団してはいないもののローゼンクロイツと同様に学んだ人物として、パラケルスス（Paracelsus（本名Theophrastus von Hohenheim)、一四九三～一五四一）の名前が挙げられており、発見された地下室にもパラケルススの著作があったとされる。

「名声」が出版された翌年の一六一五年、同じくカッセルにて、第二のマニフェストとなる「友愛団の告白（Confessio Fraternitatis)」（以下「告白」とする）が出版される。冒頭の説明によると、先の「名声」は断じて「でっち上げの産物」ではないが、「あまりにも深く秘匿されたもの」があると考えるであろう学者たちに向けて、「ここに

少々補足してわかりやすく詳述しておく」ために「告白」が書かれたという。[二十六] そして、「偽錬金術」に対する警告と、「キリストに対する信条告白をなし、教皇を断罪し、真の哲学者たちに左担し、キリスト教的生活を実行」している人びとに向けた、薔薇十字の友愛団への加入の呼びかけによって、「告白」は締めくくられる。[二十七]

さらに続く一六一六年、シュトラスブルクの出版社から、『クリスチャン・ローゼンクロイツの化学の結婚。一四五九年（Chymische Hochzeit: Christiani Rosencreütz. Anno 1469）』（以下『化学の結婚』とする）と題する作品が出版された。先の「名声」と「告白」が、友愛団のメンバーによる友愛団とその始祖であるローゼンクロイツについての紹介、ならびに同時代人への呼びかけという体裁を取っているのに対して、『化学の結婚』は、ローゼンクロイツ自らによる一人称小説の形式による作品である。物語では、招待を受けたローゼンクロイツが王家の結婚式に参加するまでの様子が描かれており、創世記における神の創造に倣う七日間の出来事が中心となっている。デュルメンによると、『化学の結婚』は「アンドレーエによる最も有名で最も普及した著作」であり、「きわめて多様に受容され［…］、錬金術師も薔薇十字団員も、人智学者もフリーメーソンも、自分たちの秘儀［Esoterik］に関わる文書かつ源泉として評価」[二十八]する作品となった。

（2）反響

これら一連の薔薇十字文書に対する反響は大きかった。最初の「名声」が出版されると間もなく、「ヨーロッパの書籍市場に文字通り書物が氾濫」[二十九]し、「薔薇十字団に賛同もしくは反対する二百以上の文書が一六一四年から一六二〇年のあいだに現われ、十八世紀の初頭までにはおよそ九百の文書が数えられる」[三十]ほどであったという。これらの文書には、著者の名前が記されたもののほか、アルファベットのみ、匿名あるいは偽名によって書かれたものもあり、薔薇十字文書を「パラケルスス主義と邪悪極まりない魔術」と批判する医師や、薔薇十字団員を「シュヴェンクフェ

ルト主義者、ヴァイゲル主義者、狂信者、再洗礼派、偽装したイエズス会士、自由思想家、無神論者、さらには害虫」と批判する神学者たちがおり、あるいは薔薇十字団員を「冬王」、すなわちプファルツ公フリードリヒ五世の加担者として批判する者もいた。[三十一] また他方、「名声」とともに出版されたハスルマイアーの「応答」のように、薔薇十字文書の呼びかけに応え、賛同する者たちが数多く登場した。ハスルマイアーは熱心なパラケルスス主義者で錬金術師だったが、他にも、パラケルスス派の医者や神秘的な傾向を持つ神学者、あるいは単に好奇心を持ったエリートたちが、薔薇十字文書の呼びかけに積極的に応えた。この種の著作を発表した者たちのほとんどはアカデミックな素養のある知識人たちで、さらに山師やいかさま師の類も便乗したのであった。[三十二]

こうした反響はドイツ以外の国々にも広がると共に、薔薇十字団は実在するのか、そもそもこれらの文書は誰によって書かれたのか、といった問題[三十三]について、さまざまな憶測が飛び交うことになるのである。

三．ユートピア思想とアンドレーエ

薔薇十字騒動の興奮冷めやらぬ一六一九年、アンドレーエは『クリスティアノポリスに関する記述（Reipublicae Christianopolitanae descriptio）』[三十四]（以下『クリスティアノポリス』とする）を出版した。この作品は、ドイツ語圏で書かれた古典的なユートピア文学として知られており、トマス・モアの『ユートピア』（一五一六年）、カンパネッラの『太陽の都』（一六〇二年執筆、一六二三年出版）にならぶ三大ユートピア作品の一つにも数えられる。本節ではまず、『クリスティアノポリス』の概要を説明した後、この作品に対する評価を見ていくことにしたい。

（1）『クリスティアノポリス』

物語は、あるひとを探して虚しくさまよった「私」が、かつて敵対的な扱いを受けた「学問の海」にもう一度出る

ことを決心し、「空想の船」に乗り込む場面から始まる。この船が難破し、木切れにつかまって泳いだ「私」は、ある島に漂着する。唯一身につけていた衣服を乾かしていると、島の住人がやって来て、「私」の状況に同情し、都に案内する。都のすばらしさに感嘆する「私」に向かって案内人は、「世間で辛い思いをし、居場所を失くしていた善人たちが、この島にたどり着き、真実と善の故郷としてその都を「クリスティアノポリス」と命名したのだ」と説明する。その後「私」は、異邦人に対する三つの試験を受けた後に、従者を与えられて、クリスティアノポリスを見学することを許される。

以上の冒頭部分を含めて、作品は一〇〇章から構成されており、その前後に、プロローグとして読者への挨拶「ごきげんよう、キリスト者の読者諸君！（Salve, Lector Christiane）」と、エピローグ（クリスティアノポリスからの旅立ちと再訪の誘い）が置かれている。本文では、主人公である「私」がさまざまな施設を巡りながら、産業や市民の生活について観察した様子や、住民との会話の内容が順を追って描かれている。さらに、主人公にとって既知の社会とクリスティアノポリスとの比較によって、前者に対する批判と後者の優越性の強調が随所に散りばめられている。

（2）『クリスティアノポリス』に対する評価

それでは、ユートピア文学の系譜において『クリスティアノポリス』はどのように評価されているだろうか。例えば、第二次世界大戦前から一九七〇年代にかけて技術史的な観点からの文明批評を展開したマンフォード（Lewis Mumford　一八九五～一九九〇）は、一九二二年に発表された『ユートピアの系譜（The Story of Utopias）』で、プラトン、モアに続いて、アンドレーエの『クリスティアノポリス』を紹介している。マンフォードは、アンドレーエが「人の生き方について説教口調でだらだらと持論を披瀝」し、「とりわけ、当時のドイツで論争の火種となって

いたキリスト教の概念について述べたくだりなどは退屈に感じられる」ため、「その長口舌にうんざりさせられることもある」[三十五]とする一方で、「クリスティアノポリスを描写した部分ではアンドレーエの洞察は深く、その見解は健全で、その提案は合理的」であって、「時代と環境を三百年も先取りしたように思える斬新な考え」や、「そのすぐれた知性と公平無私な態度のおかげで、クリスティアノポリスはそれ以後のユートピアンたちが押しつけてくる退屈な旅行ガイド風の描写とは一線を画している」[三十六]と絶賛している。すなわち、マンフォードにとっては、「キリスト教徒の都市の姿を描いたのは、ルター派のアンドレーエというよりはむしろヒューマニストのアンドレーエ」[三十七]なのである。

モアの『ユートピア』出版五〇〇年を機に、二〇一六年に出版されたショルデレ（Thomas Schölderle）の『ユートピアの歴史』[三十八]では、プラトンの『国家』から二十世紀の作品まで、各時代の代表的なユートピア作品が扱われているが、「ルネサンスから近世まで」と題する章[三十九]で扱われるのは三作品、カンパネッラの『太陽の都』、ベーコンの『ニューアトランティス』に加えてアンドレーエの『クリスティアノポリス』である。ショルデレによると、かつては「（プロテスタント・）キリスト教的観点による、カンパネッラの『太陽の都』の味気ないパラフレーズ」と揶揄されたこともある『クリスティアノポリス』だが、すでに長らくカンパネッラとベーコンの古典的ユートピアに並ぶ位置を占めているという。そして、カンパネッラやシュティブリン（Kasper Stiblin）[四十]のユートピア小説に依拠する部分がある一方で、それら先行するユートピアとは異なって、「プロテスタンティズムの敬虔かつ道徳的な教え」を中心に据える点が『クリスティアノポリス』の特徴であり、理想社会の理論や実践的な手引きというよりも、「寓意的なイメージやモチーフの形をとって語られる教育学」として理解される作品であるという[四十一]。

なお、マンフォードがアンドレーエの合理性や先進性を評価し、ショルデレがプロテスタント的特徴や教育学的側面を強調するという違いはあるものの、両者は、アンドレーエと薔薇十字運動とのつながりに触れていない点で共通している。もちろん、そうした連関はユートピア文学史を描く上では不必要な情報であるのかもしれないが、本論文

の関心からは興味深い事実である。

四．アンドレーエとは誰か

ここまで見てきたように、『化学の結婚』と『クリスティアノポリス』は薔薇十字運動とユートピア思想という二つの異なる文脈で語られてきた。ではいったい、この二つの作品を執筆したアンドレーエとはどんな人物であったのか。本節ではこの問いの手がかりを得るため、アンドレーエの伝記を概観した後、両作品が執筆される間に起こったあるスキャンダルに光を当てることにしたい。

（1）生涯[四十二]

アンドレーエは、一五八六年八月にヴュルテンベルク公国のヘレンベルクで生まれた。祖父ヤーコプ（Jakob Andreae　一五二八～一五九〇）は、「ヴュルテンベルクのルター」の異名をとるルター派の有力な聖職者で、ルター派内部での論争を収拾させる目的でまとめられた一致信条（一五七七年）の起草者の一人でもあった。祖父ヤーコプと同じくルター派の聖職者となった父ヨハネス（Johannes Andreae　一五五四～一六〇一）は、若くして教会の要職に就き、地元の知事の娘で、後にアンドレーエの母となるマリアと結婚した。しかしヨハネスは結婚後ほどなくして病に倒れ、一六〇一年、アンドレーエが五歳のときに亡くなった。もともと病弱だったという父はアンドレーエの伝記においてあまり存在感がないが、建築家や鍛冶職人たちとの付き合いや、数学、錬金術、芸術への関心は、アンドレーエに通じる部分があるとされる。それに対して母マリアはエネルギーあふれる人物であり、ヨハネスの療養中には、父の世話をしていた医学生から、医術および薬学の知識を学んだようである。父の死後、一六〇一年にマリアは子どもたちを連れてテュービンゲンに居を移し、自ら宮廷薬剤師として勤務しながら、家計を支えることになった。

転居の翌年にアンドレーエはテュービンゲン大学での学業を開始し、一六〇三年に学士号、一六〇五年には修士号を得る。しかし、一六〇七年、アンドレーエは後述のスキャンダルが原因で学業を中断することになった。その後、大学での学業を再開したアンドレーエは、一六一四年に博士号を取得するとともに、シュトゥットガルト近郊のファイヒンゲンで副牧師の職を得た。また同年、牧師の娘アグネスと結婚する。

職と伴侶を得たアンドレーエは、その後、聖職者としての地位を着実に確立していくことになる。一六二〇年にカルフの教区監督、一六三九年にシュトゥットガルトの宮廷牧師および宗教局参事を務め、一六五〇年にはベーベンハウゼンの修道院長兼監督長となった。一六五四年、七七歳のアンドレーエは、アーデルベルクの修道院長兼監督長に就任するが、同年六月にシュトゥットガルトにて没した。

（2）『化学の結婚』の執筆

では、アンドレーエは薔薇十字運動とどのような関わりを持っていたのだろうか。薔薇十字運動の発端となった「名声」、「告白」、『化学の結婚』のうち、『化学の結婚』についてはアンドレーエ自身が自ら著者であることを認めている。自伝によるとアンドレーエは、すでに一六〇二～一六〇三年頃、すなわち十六、七歳の頃から創作を始めていたという[四十三]。そこでの説明によると、喜劇作品を二つ執筆した後に、さらに二つの作品を執筆したがそれらは失われてしまったとされ、まだ手元に残っている作品として、『化学の結婚』が挙げられているのである。なお、アンドレーエが自らの生涯を年表形式でまとめた著作のなかでは、『化学の結婚』を執筆したのが一六〇五年と記されており[四十四]、本作品はいずれにせよ一六〇七年までの間に書かれたものであると考えられている[四十五]。

その当時のテュービンゲン大学では、ルター派の正統的な神学が支配的な影響力を持つ一方で、神学部以外の学部や大学の外部では、パラケルスス派の医学が流行し、新たな自然科学が胎動していた。アンドレーエ自身も、標準的

な神学生として正統派の神学を学びながら、並行して法学部と医学部の講義も聴講していた。[四十六] さらに、高名な祖父の人脈の恩恵もあって、アンドレーエは多彩な教授達との親交を深めている。特に、著名な法学者であったベゾルト（Christoph Besold　一五七七～一六三八）とは親しい関係になり、多様な分野から収集された蔵書四千冊を有するベゾルトの図書室に立ち入りも許されていた。さらに大学の外でも、錬金術師や終末論者たちなどとの交際があった。こうして、テュービンゲン大学を中心とする師や友人たちとの議論と、広範かつ熱心な読書から、アンドレーエは大いに刺激を受けたのである。

（3）スキャンダルと遍歴

しかし一六〇七年、アンドレーエはあるスキャンダルにより、テュービンゲン大学での学業の中断を余儀なくされる。その理由について、自伝では、自分が大学の重要人物に気に入られていたことや潤沢な奨学金を受けていたがために「私をほとんど破滅させるほどの黒い嵐」をもたらしたこと、アンドレーエを含む複数の者を巻き込んだ事件がエンツリン（Matthäus Entzlin）という人物の怒りを買ったことが説明されてはいるが、具体的にどのような事件があったのかは詳しく述べられていない。[四十七] 現在の研究によると、ここで示唆される「黒い嵐」とは、ヴュルテンベルクの書記局長（Kanzler）で法学教授でもあったエンツリンの家で結婚式が行われた際、花嫁の品行を疑問視させるような風刺文書が出回った事件であったと考えられている。[四十八] その文書を作成した犯人としてアンドレーエにも嫌疑がかかったが、彼は読者としてその文書を面白がって読み、他の友人へと回しただけだと証言し、結局のところ犯人の特定には至らなかった。この事件と犯人探しは一六〇七年の四月から六月にかけて行われ、アンドレーエへの嫌疑も一応は晴れたのだが、その後彼は大学を去ることになったのであった。

そしてその後、一六〇七年から一六一四年まで、アンドレーエはいわば遍歴の時代に入る。貴族の子息の随伴者と

して、あるいは一人で、ドイツ各地のほか、ジュネーブ、チューリッヒ、パリ、さらにイタリアの各都市を旅行し、旅に出ていない間はテュービンゲン近郊で家庭教師を務めるなどしていた。アンドレーエは、こうした旅行を通じて新たに多くの知己を得ると同時に、テュービンゲンでの付き合いも継続していた。またこの間、法学者でありパラケルスス派の医師でもあったヘス（Tobias Hess　一五五八～一六一四）との関係を深め、アーント（Johann Arndt　一五五五～一六二一）の著作から大きな影響を受けた。

「名声」と「告白」はまさに、こうしたアンドレーエの遍歴時代に生まれた文書であると現在では考えられている。『化学の結婚』とは異なり、アンドレーエは、「名声」についても「告白」についても、一度も作者であることを明確に認めてはいない。しかし、アンドレーエもその一員であったヘスを取り巻く友人グループが、両文書を生んだ母体であり、おそらくは両文書の作成にアンドレーエが誰よりも深く関わっていたのである。[四十九] 薔薇十字文書が出版された一六一四年は、アンドレーエが遍歴時代を終えたのと同じ年であった。そして、ヴァイヒンゲンで副牧師を務めていた一六二〇年までの間、作家としてのアンドレーエは最も多産な時期を迎えることになるのである。

おわりに

本論文では、薔薇十字文書の生みの親と、ユートピア文学として名高い『クリスティアノポリス』の著者という、アンドレーエの相反するイメージを追いながら、その二つの作品が執筆された時期にアンドレーエの身に起こった出来事に焦点を当て、両作品が誕生した背景を探ってきた。アンドレーエの相反するイメージを一人の作者像へと収斂させるにあたって、本論文によりいくつかの論点が見えてきたのではないだろうか。ここではさしあたり、以下の三点を今後の課題として挙げておきたい。一つめは、アンドレーエの証言に関する課題である。アンドレーエは、薔薇十字運動に対して、否定的なコメントを数多く残しているが、その内容が文字通りのものか、あるいは偽装されたも

のか、実際の証言と関連するテキストに基づいて整理することが必要になるだろう。二つめは著作の内容に関して、薔薇十字文書と『クリスティアノポリス』の内容を比較し、その共通点と相違点を明らかにすることが不可欠である。三つめは、アンドレーエ周辺の証言を検証するという課題であり、アンドレーエをめぐる思想的な影響関係（ベゾルト、ヘスら）を明らかにすることも重要となるだろう。そして、これらの課題に取り組むなかで、薔薇十字運動とユートピア思想のイメージを新たに描き直すことが、ひょっとすると必要になるのかもしれない。

一　ヨーハン・V・アンドレーエ『化学の結婚』種村季弘訳、紀伊國屋書店、一九九三年（普及版二〇〇二年）。なお、以下の翻訳も存在している。アンドレーエ「化学の婚礼」『キリスト教神秘主義著作集　第一六巻』中井章子訳、教文館、一九九三年、一一三〜二二七頁。

二　ただし、以下の論文では詳細に紹介されている。副島美由紀「J・V・アンドレーエの『クリスティアノポリス』―薔薇十字・敬虔主義・啓蒙主義を繋ぐユートピア」小樽商科大学人文研究一〇九、二〇〇五年、十七〜四八頁。また都市構造や建築に焦点を当てた紹介として、以下の報告がある。丸山純「理想都市クリスティアノポリスの形態と著者J・V・アンドレアの思想との関係」日本建築学会計画系論文報告集第三五〇号、一九八五年、八六〜九四頁。

三　十七世紀初頭における薔薇十字運動の発端から二十世紀までの展開を概観した『薔薇十字団』を執筆したマッキントッシュは、以下のように述べている。「「薔薇十字団」という言葉が英語の語彙に入って以来、相当長い時間が経過した。しかし、これほどさまざまな意味で、また混乱して使用されているものも少ない。薔薇十字団は二十世紀のオカルト・グループの同意語として言及されることがある。錬金術と関連するもの、ヘルメス学の探求を表す曖昧模糊とした包括的な

擁護として使用されることもある。マルクス主義やカトリシズムのように、特殊な教義であるかのように言われる場合もある。」（クリストファー・マッキントッシュ『薔薇十字団』吉村正和訳、ちくま学芸文庫、筑摩書房、二〇〇三年、二四頁）

四　*Johann Valentin Andreae : Christianopolis*. Introduced and translated by Edward H. Thompson. Dordrecht : Kluwer Academic Publishers, 1999, p. xvf.

五　ibid., p. xvi.

六　*Joh. Val. Andreae Dichtungen zur Beherzigung unsers Zeitalters : Mit einer Vorrede von J. G. Herder*. Übersetzt von Karl Gottlob Sonntag .Leipzig : Göschen, 1786. (http : //www.mdz-nbn-resolving.de/urn/resolver.pl?urn=urn : nbn : de : bvb : 12-bsb10104634-2（二〇一八年一一月一八日閲覧)) ヘルダーによる序文は以下の書籍に再録されている。Herder Johann Gottfried ; Otto Regine (Hrsg.). *Denkmale und Rettungen : literarische Porträts*. 1. Aufl. Berlin ; Weimar : Aufbau-Verlag, 1978, S. 147-156.

七　*Johann Valentin Andreae : Gesammelte Schriften*. Hrsg. von Bernd Roling und Wilhelm Schmidt-Biggemann, Stuttgart-Bad Cannstatt : Frommann-Holzboog, 19 Bde., 1994ff.

八　https : //www.frommann-holzboog.de/editionen/1209?lang=de（二〇一八年一一月一八日閲覧）

九　Erschließung des Briefwechsels von Johann Valentin Andreae (1586-1654). http : //www.hab.de/de/home/wissenschaft/forschungsprofil-und-projekte/erschliessung-des-briefwechsels-von-johann-valentin-andreae-1586-1654.html（二〇一八年一一月一八日閲覧）

十　Early Modern Letters Online (EMLO) http : //emlo.bodleian.ox.ac.uk/（二〇一八年一一月一八日閲覧）

十一　注六を参照。

十一 ibid., S. 360-361.

十二 Selbstbiographie Joh. Valentin Andreä's, aus dem Manuscripte übersetzt und mit Anmerkungen und Beilagen begleitet von Prof. [David Christoph] Seybold. Winterthur : Steiner 1799. cf. *Andreae : Gesammelte Schriften,* Bd. 1,1, 2012, S. 7.

十四 カルフなどでの記念行事のカタログには、年表や家系図なども含まれている。*Johann Valentin Andreä 1586-1654 : Leben, Werk und Wirkung eines universellen Geistes ; Ausstellung zum 400.Geburtstag in Zusammenarbeit der Evangelischen Kirchengemeinde Calw, des Landeskirchlichen Archivs Stuttgart und der Großen Kreisstädte Calw, Herrenberg und Vaihingen an der Enz. Katalog.* Bad Liebenzell : Kommissionsverlag Bernhard Gengenbach, 1986. この行事での講演は以下にまとめられている。Friedrich Bran (Hrsg.), *Johann Valentin Andreä, 1586-1654 : ein universaler Geist des 17. Jahrhunderts in internationaler Sicht.* Bad Liebenzell : B. Gengenbach, 1987. アムステルダムのくルネス哲学図書館での展覧会のカタログは以下。Carlos Gilly und Bibliotheca Philosophica Hermetica (Hrsg.), *Johann Valentin Andreae : 1586-1986 ; Die Manifeste der Rosenkreuzerbruderschaft ; Katalog einer Ausstellung in der Bibliotheca Philosophica Hermetica.* 2. Aufl. Amsterdam, 1987.

十五 Carlos Gilly und Bibliotheca Philosophica Hermetica (Hrsg.), *Cimelia Rhodostaurotica : die Rosenkreuzer im Spiegel der zwischen 1610 und 1660 entstandenen Handschriften und Drucke ; Ausstellung der Bibliotheca Philosophica Hermetica Amsterdam und der Herzog-August-Bibliothek Wolfenbüttel.* Amsterdam : In de Pelikaan, 1995.

十六 Bibliotheca Philosophica Hermetica (Hrsg.), *Rosenkreuz als europäisches Phänomen im 17. Jahrhundert : Akten und Beiträge anläßlich des Kongresses Wolfenbüttel 23.-25. November 1994.* Amsterdam : In de Pelikaan, 2002.

十七 Richard van Dülmen, *Die Utopie einer christlichen Gesellschaft : Band 1. Johann Valentin Andreae (1586-1654).*

Stuttgart-Bad Cannstatt : Frommann-Holzboog, 1978.
デュルメンは薔薇十字文書および『クリスティアノポリス』の翻訳も編集している。*Fama fraternitatis (1614) Confessio fraternitatis (1615) Chymische Hochzeit : Christiani Rosencreutz. Anno 1459 (1616).* Stuttgart : Calwer, 1973 ; Johann Valentin Andreae, *Christianopolis.* Stuttgart : Calwer, 1972.

十八　John Warwick Montgomery, *Cross and Crucible : Johann Valentin Andreae (1586-1654) Phoenix of the Theologians.* Vol.1 Andreae's life, world view, and relations with Rosicrucianism and alchemy ; Vol.2 The Chymische Hochzeit. Hague : M. Nijhoff, 1973.

十九　注四を参照。

二十　Martin Brecht, *Johann Valentin Andreae, 1586-1654 : eine Biographie.* Göttingen : Vandenhoeck & Ruprecht, 2008.

二十一　以下で紹介する三つの文書と「全世界の普遍的かつ総体的改革」は、アンドレーエ著作集第三巻に収められている。*Andreae : Gesammelte Schriften,* Bd.3, 2010. また日本語訳は、種村訳『化学の結婚』（付録として「名声」「告白」および「全世界の普遍的かつ総体的改革」を含む）を参照のこと。

二十二　薔薇十字運動に関する研究は、一九七〇年代以降、キリスト教の正統的な伝統とは異なる系譜に属する宗教的伝統に対する関心の高まりとともに、その数を増してきている。中でも、イエイツ（Frances A. Yates）の研究（*Rosicrucian Enlightenment.* London : Routledge & Kegan Paul, 1972（フランセス・A・イエイツ『薔薇十字の覚醒　隠されたヨーロッパ精神史』山下知夫訳、工作舎、一九八六年））は、薔薇十字運動を当時のヨーロッパにおける複雑な政治状況との関連の中で描きながら、その思想ないし志向を啓蒙運動に繋がる思想史および学問史に位置づけた点で画期的であり、日本を含めて広範な反響を呼んだ。しかしイエイツが利用した資料や解釈についてはさまざまな問題が指摘されている。たとえば以下を参照。Carlos Gilly, "Die Rosenkreuzer als europäisches Phänomen im 17. Jahrhundert

und die verschlungenen Pfade der Forschung", in : *Rosenkreuz als europäisches Phänomen im 17. Jahrhundert*. S. 22-24, Anm .10.

二十三　この文書は、ヴェネツィアの作家ボッカリーニ（Trajano Boccalini　一五五六～一六一三）の小説『パルナッソス報告』からの抜粋を翻訳したものである。

二十四　Gilly, *Cimelia Rhodostaurotica*, S. 25-29。「名声」への言及として最初に確認できるのは、一六一〇年に「名声」を入手したというハスルマイアーの言葉であるという。

二十五　種村訳『化学の結婚』、一八八頁。

二十六　前掲書、二一六～二一七頁。「告白」では、友愛団の思想内容に関する説明のほか、クリスチャン・ローゼンクロイツの生没年に関する補足があり、一三七六年に生まれて一〇六歳まで生きたとされる。

二十七　前掲書、二三二～二三五頁。

二十八　van Dülmen, *Die Utopie einer christlichen Gesellschaft*, S.64f.

二十九　Gilly, Rosenkreuzer als europäisches Phänomen, S. 20.

三十　ロラン・エディゴフェル『薔薇十字団』田中義広訳、白水社、一九九一年、十二頁。

三十一　Gilly, Rosenkreuzer als europäisches Phänomen, S. 21f.

三十二　Brecht, *Joann Valentin Andreae*, S. 80-85.

三十三　ただし、クリスチャン・ローゼンクロイツについては、そもそもローゼンクロイツが埋葬された一四八四年に生まれてすらいなかったパラケルススの本が地下室にあったという記述があるため、最初から架空の存在として描かれている。

三十四　*Adreae : Gesammelte Schriften*, Bd. 4, 2018.

三十五　ルイス・マンフォード『ユートピアの思想史的省察』月森左知訳、新評論、一九九七年、一一三頁。

三十六　前掲書、一一四頁。マンフォードはさらに、アンドレーエに比べて、ベーコンとカンパネッラは「二流の誹りを免れない」とも述べている。

三十七　同右。

三十八　Thomas Schölderle, *Geschichte der Utopie : eine Einführung.* 2., überarbeitete und aktualisierte Auflage. Köln ; Weimar ; Wien : Böhlau Verlag, 2017.

三十九　ibid., S. 67-84.

四十　シュティブリンは『エウダイモン人の国に関する短い報告（Commentariolus de Eudaemonensium Republica）』（一五五五年）という「ドイツ最初のユートピア小説」を書いた。この小説については、以下の論文を参照。副島美由紀「反宗教改革時代のユートピア―カスパール・シュティブリンの『エウダイモン国見聞記』」小樽商科大学人文研究第一〇七号、二〇〇四年、五七～八一頁。

四十一　Schölderle, *Geschichte der Utopie,* S.73-78.

四十二　本項目はブレヒトの伝記および展覧会のカタログ（注十四 *Johann Valentin Andreä* 1586-1654）を参照した。

四十三　*Anreae : Gesammelte Schriften,* Bd. 1, 2, S. 52-55.

四十四　*Adreae : Gesammelte Schriften,* Bd. 1, 2, S. 174f.

四十五　cf. Roland Edighoffer, "Einleitung", in : *Andreae : Gesammelte Schriften,* Bd. 3, 2010, S. 8-10.

四十六　*Johann Valentin Andreä 1586-1654,* S. 38f.

四十七　*Andreae : Gesammelte Schriften,* Bd. 1, 1, S. 65-67.

四十八　Edighoffer, Einleitung, S. 10f. ; Brecht, *Johann Valentin Andreae,* S.30f.

四十九　Brecht, *Joann Valentin Andreae,* S. 65-92 ; Gilly, Rosenkreuzer als europäisches Phänomen ; Edighoffer, Einleitung, S.18-25.